

灰谷健次郎『兎の眼』をめぐって

— 善財童子／作者評価 —

柴田 哲谷
愛知学泉大学

A Study of Haitani Kenjiro work "Rabbit eye"

— About Zenzaidoji / Evaluation of the author —

Tetsuya Shibata

キーワード：美 Beauty、抵抗 Resistance、優しさ Gentleness、児童文学 Juvenile literature、
純文学 Serious literature、世相 Social situation

1. 灰谷健次郎『兎の眼』と善財童子

『兎の眼』は、新卒教師の小谷芙美が小学1年生を受け持って子どもや保護者、同僚らと関わる中で成長し、子どもたちも心を開いていくという物語である。小谷は時おり西大寺を訪れて善財童子に会う。文殊菩薩を囲む侍者像の一体で、彼女はその眼を美しいと思う。それは兎の眼に見えた。なぜ善財童子の眼は美しく、そして兎の眼なのだろう。

(1) 作中での扱い

善財童子について作家は直接語っていないようにだし、識者の論考も見あたらない。『兎の眼』には、西大寺を訪れた小谷が善財童子に向き合う場面がある。

あいかわらず善財童子は美しい眼をしていた。
ひとの眼というより、兎の眼だった。それはいのりをこめたように、ものを思うかのように、
静かな光をたたえてやさしかった。¹⁾

善財童子の眼がどうして美しいのかと考えて、小谷は突然、高校の恩師が授業中に、

人間は抵抗、つまりレジスタンスが大切ですよ、
みなさん。人間が美しくあるために抵抗の精神
をわすれてはなりません²⁾

と言ったことを思い出す。小谷は、受け持ちの鉄三など塵芥処理所の子どもや先輩教師足立を思い浮かべ、彼らは美しいが自分はなぜそうでないのかと自問する。

処理所の子どもたちのやさしさを思った。ハエ

を飼っている鉄三の意志のつよさを思った。パンをもってかえる諭のしんけんさを思った。

小谷は善財童子の眼に美しさを見出した。その美しさは、優しさ、意志の強さ、真剣さなどに拠っている。善財童子について直接に語っていないにしても、作中において焦点化されていることから、作者は、その事績について何らかの見識を持っていたと考えられる。

(2) 善財童子について

善財童子は、『華嚴経』の最後に置かれる「入法界品」に登場する。生家は豪商で、胎内に宿った時、財宝が家中に満ちたことから「善財」と名づけられた。「入法界品」は、その善財が菩提心（悟りを求める心）を発して菩薩の行いを知るために南方のインドへ旅し、53人をたずねて教えを請い、最後に普賢菩薩の教えを受けて究極の境地に達する過程を内容としている。たずねた人々は、菩薩、神の子、女神、修行僧、尼僧、遍歴行者、仙人、バラモン、国王、良き友、商人代表、資産者、在俗信者の女性、淑女、黄金工、香を売る商人、少年、少女、少年の師、南方に住んでいたドラヴィダ人、隸民（最下層階級）というように多彩で、遊女もいた。彼はあらゆる人を師（善知識）とし、教えを受けたのである。³⁾

善財童子の求道は、覺城の地に赴いた文殊との出会いに始まった。

仏たちが次に世に興す教え、浄らかな随伴者に関する教え、清らかな教えの広め方、仏たちの

姿や特徴がなぜ清らかで美しいのかということ、一切の仏たちがなぜ真理そのものとしての身体を完成するのかということ、仏たちの声がなぜ美しくすばらしいのかということを詳しく説き示し、(つまりは)一切の仏たちの平等な正しい法を説き明かしたのである。⁴⁾

仏は、その身体に「美」「清浄」「真理」を具現した存在なのだった。30の祈願から成る偈を捧げた善財に文殊も偈で応じ、菩薩の実践を聴くべく南方の可樂に功德雲比丘を尋ねよと指示する。かくて旅立った善財は53人から教えを受けたあと文殊に再会し、普賢の道場に導かれた。善財は普賢の手足や毛穴に、宇宙を支える風・水・火・大地、現象界の骨格をなす大海・宝山・須弥山・金剛圍山、そこに存在する住宅・宮殿・衆生、また地獄・餓鬼・畜生、それに仏や菩薩が衆生を教化する様子などを見出す。そうして仏のさまざまな智慧を得た⁵⁾。それはまた、美や清浄に近づくことでもあった。

善財童子の求道において、「抵抗」という言葉は見られない。しかし、善知識に会っては「私は菩提心を起こしていますが、まだ〇〇を知りません。何とぞ〇〇をお説きください」と請い、飽くなき行脚を続ける姿には、どこまでも真理を追究しようとする強固な精神が見て取れる。探究を阻むものがあれば抵抗したであろう。阻害者は、邪悪な意志を持って立ちはだかる怪物とは限らない。時に挫けそうになる心でもあろうし、差別やさまざまな不条理でもあろう。意志を貫こうとして進み続ける善財の姿は、大きな障害にあたかも素手で立ち向かう足立や小谷、子どもたちのありようと重なる。

(3) 西大寺の善財童子像

西大寺によれば、灰谷が同寺を訪れて善財童子を見たのは事実のようだ。教育や児童文学関係者の来訪や新聞掲載もあったという。こうした事情を具体的に知る僧はもういない。寺では文殊と従者4体を文殊五尊として祀り、善財のみを取り立てて扱うことはない。善財、優填王、仏陀波利、最勝老人の脇侍4体は、老壮少の各年代を象徴するとも考えられる。善財の「財」は「才」であって財物よりも内面の能力を指す。善財は、苦勞を厭わず道を求めることにおいて常啼菩薩と同じで、日本で言うなら二宮金次郎にイメージが似る、とのこと。⁶⁾

西大寺の善財童子(写真1)は、文殊を振り返っ

て見上げている。眼は、悟りを得た如来や菩薩が半

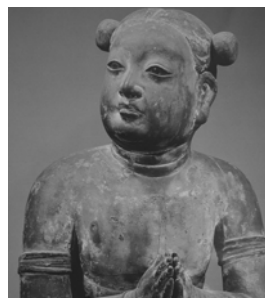


写真1
西大寺絵葉書より



写真2
安倍文殊ポスターより

眼であるのと異なり見開かれている。文殊を見つめる一途な眼には、意志と希望を見て取れる。これに対して、例えば安倍文殊院の善財(写真2)は、振り返る視線がほぼ水平で半眼に近い。

「入法界品」には善財の「眼」についての記述は見当たらない。とすれば、小谷が「ひとの眼というより、兎の眼」と感じた「眼」は、作者灰谷が見た西大寺の童子像の「眼」にほかならない。子どもに向き合ってきた灰谷が、愛らしい童子像のひたむきな眼に引かれたことは想像に難くない。

(4) 「兎の眼」とは何か

西大寺の善財童子像の眼を「兎の眼」と言い、これを小説のタイトルにしたのはなぜだろう。授業のレポートにこの問いに向き合ったものがあつた。

この学生は、本文から西大寺の善財童子に触れた部分を引き、童子の写真を示して問題に迫っている。

何故、善財童子の眼を「人の眼というより兎の眼」だと、小谷先生あるいは作者の灰谷健次郎は感じたのだろうか。上の写真が善財童子である。なるほど、意識して見たからか、兎の眼に見える。しかし何故、敢えて兎の眼なのか。他の、例えば栗鼠などの動物の眼にも見えなくはないはずだ。／そこで、兎について調べた。その結果、兎は特徴として声帯がなく、興奮時に食道を震わせる以外は鳴かないこと、人間になれやすいということ、仏教世界では献身のシンボルであることなどが分かった。⁷⁾

そして、兎が自身を火に投じてバラモン僧(実は帝釈天)に施そうとする『ジャータカ物語』⁸⁾の一話を見出し、

このことから、物言わずやさしいところや献身的なイメージなどが兎でなくてはならなかった理由なのではないかと私は考える。兎のそのよ

うな特性と共通するのが、小谷先生の憧れである善財童子やバクじいさんのやさしさ・美しさである。

と指摘した。その上で、鉄三に対する関わり方の変化など、小谷の教師としての成長を辿った後、次のように結んでいる。

小谷先生は効果があればやる、効果がなければやらないという考え方ではなく、充実して生きていくことが大切という考え方で行動に移している。(中略=筆者) 小谷先生のこれらの変化のきっかけまたは原動力として、善財童子とバクじいさんの影響が強いのである。その美しく優しい眼差しこそが小谷先生を動かしたもので、
「兎の眼」というタイトルがつけられたのだと考える。

合理的な考えである。善財童子の事績に、旅中における他者への「献身」―兎が行ったような―は見当たらないが、菩提への意志は我が身を顧みぬほどにひたむきではある。善財童子、西大寺の童子像の眼、兎の眼、兎の優しさと献身、バクじいさんの優しさは、一連のものと考えるとよからう。

物語の終わりに、大八車を引いて「出発」する者たちの前途は楽観を許さない。足立も小谷も子どもたちも、自分たちだけではどうにもならぬことがあるということを体験の中で理解している。しかし、行動しようとする。これは、彼らに、自分で考えて決めたことを結果はともかく行っていこうとする姿勢があるからで、善財童子が「発心」し、その方法を求めてひたむきに旅をする姿に通じる。

「兎の眼」は、あるべき姿をどこまでも求めようとする善財童子の眼(写真 3)であった。善財童子の姿勢は、小谷、足立、バクじいさん、鉄三らに共有され、その眼は彼らの眼でもある。灰谷は言っている。

『兎の眼』は一口でいえば、自立しようとする幼い魂が、意識的であれ無意識的であれ、その自立を妨げようとするものに対して挑んだ抵抗の譜であり、教師が子どもたちの奥深くしまいこんだやさしさを探り当てたとき、はじめて対の人間として共に生きる道を発見することができたという物語である。⁹⁾

彼はまた、このような「希望に向かって出発する向日性(p87)」が児童文学には必要だと言う。「兎の眼」は「向日性」の象徴なのである。小説としての

『兎の眼』は、人物の造形と筋立てにやや類型的な面はあるが、それを以て単純な善悪二分観に立った勧善懲悪物語と切り捨てられるものではない。



写真 3 西大寺善財童子像部分(西大寺絵葉書)

2. 灰谷健次郎への評価をめぐる

(1) 小宮山量平氏の賛辞

『兎の眼』は 300 万部も売れたベストセラーである。小宮山量平氏はこの作品を、第二次世界大戦の「トラウマ」を負った現代文学に「何がもたらされようとしているか。何が崩壊し何が再生しようとしているか」を考えさせる名作であると評価している。灰谷作品は「受難者たちに加えられたトラウマに対しての優しい癒し」となっているとも言う。¹⁰⁾

小宮山氏は、例えば『兎の眼』における「バクじいさん」のありように「優しい癒し」が見出されるとし、「どんなプロレタリア文学が、こんなにも私たちに涙を流させたことだろうか」と言った。バクじいさんの告白が、軍国主義下の受難者を「はっきりと思い浮かべて」書かれたものであり、しかも「わざとらしくお膳立て」されたものではないとも言い、それゆえ『兎の眼』は書かれた当初から「名作」であったと断じている。

大仰にも見える小宮山氏の賛辞は、この作品に見合っているのだろうか。

(2) 黒古一夫氏の批判

黒古一夫氏は小宮山氏と対立する。『兎の眼』や『太陽の子』を読んだ印象を、「新鮮」あるいは「異質」なものに出会った「心の揺れ」と表現し、それは下記の三つの要素に起因すると分析した。そして、そうしたもののこそは、人々が灰谷を支持する理由でもあると言っている。以下、要約する。¹¹⁾

1) 作家(人間)の理想が驚くほどの素朴さで描かれている。それは、理念ではなく、現実中存在する悪、不備、不都合、無知を善意で取り除いていけば実現するというもので、言わば「性善説」に支えら

れている。灰谷一流の勸善懲惡の通俗性の中に「理想」を語っているのだ。また、当時人々が求めていた「優しさ」を臆面もなく標榜していた。

2) 「優しさ」を基底にした「協働＝共同性」への楽天的な信頼が、人間尊重の思想が後退していた社会状況下での人々の期待に合致していた。その共同性には「一国社会主義」「学級王国」的な性質もある。

3) 語り口の平易さ、ストーリー展開の素朴さが、大江健三郎らの思弁的・方法的が主流の現代文学（純文学）の世界では新鮮で、素直に作品を堪能できた。「人間いかに生きるべきか」という近代文学の命題を、明確な起承転結と易しい表現で読者の心に伝えた。

黒古氏は、灰谷文学は現代文学（文化）の窮境を反映するものであり、それゆえ社会と文学（表現）の本質的な関係を問い直す材料になっていると認めつつも、児童文学という狭い（ギルド的な）世界ゆえに「批評」が十分機能せず、弱点や欠陥を持つのに「野放し」にされている灰谷文学を批評の俎上に載せたいとも言う。氏はかつて好意的に読んでいたそうだが、今ではその文学性や優しさに疑念を抱き、読者そして灰谷自身もその偽物の文学性・優しさに陥っていると考えている。

小宮山氏の見解は具体的な根拠に欠け、灰谷を過大に評価しているようにも見える。ならば、黒古氏の批判を肯うべきだろうか。

『兎の眼』は1974年の発表だが、教職員組合の様子、処理所の状況、「大八車」での廃品回収などから昭和30年代が舞台であると考えられる。（筆者の遠い記憶には「くずい、おはらい」の呼び声が残っている。）灰谷は17年勤めて、1971年に退職した。新任の小谷先生を主人公にしていることから、作品の現在も灰谷自身が新任から遠くない昭和30年代前半であろう。

幼児・児童教育専攻の学生を対象とした授業で『兎の眼』を取り上げると、多くは興味を持って読む。下記は、自身の進路にひきつけてやや教訓的に読んではいくが、正直ではある。

教師とは、生徒とは、親とは何なのか。みんな同じ人間であって、得意なことがあれば苦手なこともあり、常にずっと学び続けるものなのではないのか。小説の中から様々な視点で人間について考えるきっかけをもらった。（中略＝筆者）この学級は大きく変化してきたことが、明らかにわかる。小説では、短時間に大きく変化する

ためそれを感じとりやすい。しかし、現実には簡単に変わるなどできるはずがない。教師は長期的に考えて最終的に子どもたちにとって何が一番良いのか、子どもたちにどうなってもらいたいのか、目的を持って様々なことを行っていく必要があるだろう。¹²⁾

戦後の世相を知らないことによる違和感を別にすれば、ほとんどの学生が小谷先生と鉄三や児童たち、足立先生やバクじいさんの思いや行動に対して共感している。しかし、上記の引用もそうだが、「勸善懲惡」に快哉を叫んでいるわけではない。黒古氏は、『兎の眼』の筋立てに、「かつて全共闘の学生が東映ヤクザ映画の高倉健や藤純子が扮する『正義派』ヤクザにおのれのルサンチマンを託し、映画の最後で彼ら（彼女ら）が『悪者』を倒す場面で拍手した（p24）」構図との等質性を見ている。小谷や足立はそれほど劇的な活躍をしているのだろうか。小谷や足立が「善」で、彼らと対峙する教師や保護者、小谷の夫や役所の人間は「悪」なのだろうか。前者はそのありように向けて読者を促し、後者は懲らしめられて読者への戒めとなっているのだろうか。筆者には、読者がそれほど単純な構図で作品を捉えているとは考えられない。

善と悪は、作中に峻別されてはいない。小谷夫婦の場合、妻の視点から描かれてはいくが、客観的に妻を善、夫を悪と断じているのではない。処理所の子どもたちに無理解な教員や役所の人間は、懲らしめられるべき悪として描かれているわけではない。物語の結末は大団円風に盛り上がりつつはいるが、交渉への「出発」であって問題が解決したのではない。むしろ、その前途には大きな障害が予見される。

黒古氏はまた、違法ストライキを構える日教組に照らして、当局に話し合いで臨む足立たちの仕方は「改良主義」であり、「犯罪的」だと言う（p27）。「勤評闘争」が背景にあるとしても、現実の学校では授業も職員会議も行われていたわけで、毎日「違法ストライキ」が行われていたのではない。ストライキもやるだろうが交渉もし、妥協もするというのが実態ではなかったか。「ルサンチマン」を晴らすだけで社会の矛盾を生み出す構造に届いていないゆえ、「巨悪を撃つことができず放置し続ける（p24）」という評価は、あるいは黒古氏の目指す高みからの歯がゆさかもしれない。しかし、この作品は「巨悪」に向けて思考を促しこそすれ、「めでたしめでたし」という

安心を与えるものではない。

黒古氏は、大江健三郎の「読み手をひきつけるあざとさ、色濃い通俗性もひきうけて、そのかわりにモラリスト的なメッセージは確実に手渡す」という評言を引き、灰谷作品が「いかに生きるべきか」という近代文学の命題を「起承転結のはっきりした物語構成と易しい言葉遣いで読者の心にストレートに送り込んだ」がゆえに、『大人』の文学世界とは別なところで大きなうねりを作り出した」と言う。そして、そうした状況は、「現代文学（文化）が陥っている窮境を灰谷文学がストレートに反映している（p8）」と見ている。しかし、大江は実際には次のように書いている。

それこそ漫画・劇画の、読み手をひきつけるあざとさ、色濃い通俗性もひきうけて、そのかわりにモラリスト的なメッセージは確実に手渡す。なにを書きたいか、なぜ書くのかという志のつらぬき方において、灰谷健次郎『太陽の子』（理論社）は、前作『兎の眼』が、子供らをこえて広い読者をえた秘密を、あらためて納得させるものだ。（中略＝筆者）／わが国の文学状況には、芹沢光治良も灰谷健次郎も、その啓蒙性あるいは通俗性によって排除しかねぬ大勢がある。それは「文壇」の作家が、本来の文学的な仕事に加え、通俗的な仕事の使いわけをためらわず、それを許されもする傾向と、奇妙なことに共存する。／しかし芹沢や灰谷は、かれらの仕事それぞれの独自な力によって、逆にわが国の文学状況にむけて批判をつきつけていよう。人間とはなにか、人間的であるとはどういうことか、それを問うことが文学の根本的な存在理由であることはあきらかなのだから。しかも「文壇」の、それも若い作家たちが書きわける通俗的な仕事は、およそモラリスト的な主題から遠いものなのだから。通俗性をいいはしたが、芹沢はもとより灰谷の仕事も、マス・コミ向けの大量生産の作風とは異質の、じつに入念なものである。（「／」は改行）¹³⁾

これは、文壇作家批判であると同時に、灰谷への支持である。通俗性はあるものの、人間を問うていることにおいてエンターテインメントを越えた意義があると言っている。

(3) 清水真砂子氏の批判

清水真砂子氏も批判者である。灰谷は弱者に寄り添う「良心的」なスタンスをとる、それは人間を類型的にしか見ない「冷酷さ」に通じる、彼の描いているのは弱者の本当の姿や心ではなく彼自身である、と清水氏は言う。

まったく良心的であることは、しよせん、その人間の自己満足でしかない。基準はいつも自分にあるので、だからこそ形が先行するのである。それはひとつのアリバイ工作ともいえる。灰谷ならずとも、良心をふりかざす人間がかっこよく見えるのは、そのせいかもしれない。¹⁴⁾

権威・権力の内実には迫ったり、不条理を抉り出したりすることは文学の一側面であり、類型化や独りよがりはその達成を妨げる。これはもっともだ。そうだとすると『兎の眼』を、類型的な登場人物たちによって演じられたあからさまな良心の物語であると切って捨てられるのだろうか。灰谷の思惑のみが押し出されて小谷先生の悩みやバクじいさんの独白には全くリアリティーがないと言い切れるのだろうか。

清水氏は次の問題意識において、黒古氏に通じる。

「子どもの本である」というただそれだけの理由で、検証を免れてきた問題が相当ある。私は子どもの本という特殊性に目を奪われて、本質を見誤ることを恐れる。¹⁵⁾

子どもを対象に作られた本は本物の文学ではないのではないかという疑いが根底にあって、いわゆる純文学を基準に吟味したいように見える。年齢や環境、能力などで差があるにしても、一般的に子どもが見る世界は大人に見える世界と同じではないはずだ。大人の鑑賞に堪えるものを用意することは大事だが、子どもが大人と同様に受け止めるわけではない。大人だから見えるものもあり、子どもだから深く感じることもあるだろう。「お子様ランチ」であれ、よい食材で丁寧に作ってあれば本物の料理である。

灰谷健次郎は称揚されて権威化しすぎたのかもしれない。清水氏の追及は厳しい。

私は灰谷に、今日という時代のひとつのシンボルを見る。灰谷が自らも生き、そして作品に書くのは、良心的な生き方、正と反なら“反”の立場に立つ生き方である。それは、人が「人間的」に生きようとするとき、だれもが一度はとる生き方で、だからこそ、彼の作品は多くの読者の共感を呼んできたのだった。灰谷はおそらく今、そうした人間的な生き方を追求し、実践

しようとしている旗頭であろう。本音はどうかあれ、彼は少なくともそうであることを外から要請され、自らもそのように演技することを選びつつけているように見える。¹⁶⁾

灰谷のこのような在り方は「支配的な思想」と同列で、それを相対化し超克することはできないと清水氏は言う。芸術（＝純文学）ではなく、エンターテインメントだということだ。ならば、「正」と「反」を止揚し、次時代を拓く「文学」は、今日どれほどあるのだろうか。

(4)『兎の眼』の可能性

小宮山氏の解説は次のように終わる。

たとい、日本の高度成長の歩みが破綻し、バブル経済によって挫折するにしても、少なくとも子どもたちは生来の楽天主義の旗をかかげて前進するはずでした。ところがどうでしょう。映画のストップモーションのように、今やその全体が停止し、やがて後退しつつあります。そんな受難者たちが増幅されている日本の現状に対し、この小説そのものが、かえってエールの役目を果たさねばならない時を迎えつつあるような気が私にはするのです。¹⁷⁾

子どもは世相と無関係に楽天的なのか、経済の挫折が生んだ受難者とはどういう人々なのか、「かえって」とは世相を写すのとは逆にという意味なのかなど、判然としない点や吟味すべき部分が目に付く。

要は、この作品が同時代の人々を励ますということである。「果たさねばならない」という捉え方には違和を感じるが、世相と小説の関係を考えることは自然であり、結果としてなら小説が世相に働きかけるという見方も肯ける。

『兎の眼』が発表された 1974 年は、2 度目のオイルショックを経験し、中国とは国交が回復し、経済成長至上主義の価値観が転換される可能性を感じさせた年であった。一方、この小説の舞台は、日米安保条約改定を経て高度経済成長へ踏み出した 1960 年代である。時代がその後好ましい方向へ進んだかは別としても、1984 年に小宮山が、『兎の眼』が自分たちの針路を問い直すべき時代の転換点に「エール」として受容されるという見方（あるいは期待）をしていたのは興味深い。

『兎の眼』は、いわゆる「純文学」にしては通俗的なものかもしれない。小谷の夫や同僚教師の人物像も

典型的で、現実批判の射程は狭いとも見える。

だが、ベストセラーになっただけの迫力はある。少なからぬ読者が、足立の情熱、小谷の真摯、子どもたちの純粋、バクじいさんの強さと優しさに心を動かされ、人間と社会について考えさせられもしただろう（眼前の学生たちがそうであるように）。

昭和 30 年代の混沌にあつて灰谷が経験を下地に描こうとしたこと―抵抗と希望―は、現代においては意味を持ち得ないのか。社会の現実を超越的に対象化し吟味するのが純文学や批評の立場であるなら、それはそれで必要である。しかし、また現実の問題に現実の中で向き合う文学があってもいい。

あまりにも売れ、教祖の如く民衆に浸透した灰谷ゆえ、影響の大きさに比例して瑕疵も顕在化したと見える。しかし、現今の世相から冷静に読み返すことで、『兎の眼』は別の相貌を見せるかもしれない。

注

- 1) 灰谷健次郎：『兎の眼』，角川文庫，101（1984）
- 2) 同上書，102，（次の引用も同頁）
- 3) 中村元：『現代語訳大乘仏典 5 「華嚴経」「楞伽経」』，東京書籍，（2003）
- 4) 木村清孝：『仏教経典選 5 華嚴経』，筑摩書房，260-261（1986）
- 5) 前掲書 3)
- 6) 2017.3.3 西大寺塔頭清浄院住職佐伯俊源氏談
- 7) 2011 年度 3 年生 N・E 女（許諾を得て引用、若干修正）
- 8) 中村元・増谷文雄：『仏教説話大系第 4 巻ジャータカ物語一』，鈴木出版，111-119（1981）
- 9) 灰谷健次郎：『灰谷健次郎の発言〈6〉生きること・感じること』，岩波書店，84（1999）
- 10) 小宮山量平：「受難者たちへのエール―名作『兎の眼』の座標」角川文庫版『兎の眼』，338（1998）
- 11) 黒古一夫：『灰谷健次郎―その「文学」と「優しさ」の陥穽』，河出書房新社，11-15（2004）．以下引用頁は同書
- 12) 2011 年度 3 年生 K・S 女（許諾を得て引用）
- 13) 大江健三郎：『方法を読む＝大江健三郎文芸時評』，講談社，137-140（1980）
- 14) 清水真砂子：『子どもの本の現在』，岩波書店，219（1998）
- 15) 前掲書 14)，5
- 16) 前掲書 14)，222
- 17) 小宮山量平、前掲書、p338